

変革期の価値

～次世代の国そして自己の「かたち」改革を～

常務理事 上席主席研究員 村林 正次

はじめに

失われた 10 年といわれた時代に「価値総研」として改称・新生して、早いもので 10 年が経過し、そして、政権交代に伴う時代の転換期を迎えている。

これまでも時代の転換期などとは何度も言われてきた。例えば、国際化・情報化への対応や高齢社会の到来、車依存社会からの脱却、また、地球環境問題や資源問題、道州制、首都移転等への早急な対応の必要性は 30 年以上前から、私の学生時代から国土・都市問題の大きなテーマであった。また、オイルショックやバブル崩壊等その度に、本格的に社会構造を変革すべきとの声が高まってきたが、結局、惰性的に過ぎてしまった。これまでの変革への対応は将来の先取り的であったが、今や現実のものとなっており、先送りが許されない事態となっていると考えるべきであろう。

政権交代の是非はともかく、これを都市空間の価値創造を目指した真の時代の変革期にするチャンスとすることが重要であろう。

価値を考える

(1) 価値にこだわる

「価値」を社名としていることもあり、「価値」にこだわってきた。価値の定義や議論は果てしないものがある。時間軸によるもの、使用価値・希少価値のような対極的なもの、文化価値などのような定量化し難いもの、個々の価値観により評価されるもの等などである。本稿で価値を正面から議論するものではないが、都市空間を考える際には、「時間の経過の中で定評を得たもの」が「価値」を有するものと考えている。簡単に言えば何時の時代にも誰もが欲しがらるもの・必要とされるものであり、特別な価値はつかないが一定の価格で常に取り扱われるものであり、この代表が「住宅・住環境」の資産価値である。

一方で、時代により変化する「価値観」は重要である。

一過性ではなく新たに定評を得たものは新たな価値となるが、その新たな価値を認識するには一定の時間を要することになるため、その転換期にその価値観の変化を認識することが難しいというジレンマを抱えることになる。

(2) 変革期の価値観

変革期には価値観の変化を認識し、それを実体化することが重要である。

高齢化はすでに渦中にあり、国際化もリーマンショックに代表される世界的金融危機にて改めて認識された感がある。さらに、自動車業界に代表される環境対応と新興国への低価格普及戦略がパイを増やすも利益率が低下する構造の中での国際的再編の本格化は、例えば、いよいよ我が国の給与水準が頭打ちになることを暗示している。

価値観の変革の例として住宅価値を挙げてみよう。

昨今の住宅ローンの延滞率の増大は世界的金融危機が拍車をかけたかもしれないが、基本的には来るべき姿である。住宅は国民の資産といわれながらも実は単なる長期償却資産であったことが認識されてきたが、今後もこれまでの政策の延長上では、この最大級の国民的問題は解決されない。一刻も早く、所得水準に併せた住宅価格の設定とそのための仕組みの再構築が必要とされている。住生活基本法制定までの熱い議論はなくなり、何故か、長期的なハード的な耐用性や環境負荷等に話題が傾斜してしまっている。機能・性能の充実は不可欠であるが、これだけでは、200 年以上耐用可能な住宅が 30 年で建替えられる可能性を大いに含んでおり、そうなると、資産価値が無いばかりか、かえって環境負荷は増大してしまうことになる。

一生をかけた膨大な買い物である住宅が、終の棲家としての安心だけ良かった時代から、これからは支払い能力に応じた本来の住宅価格とその価格に見合った価値、すなわち、いつでも売却・賃貸できる、担保に出来るといった、資産として活用できる状況を政策目標とすることが必要である。幸いなことに次第にそのことに気がつくようになってきた。

コンパクトシティも欧米での議論を導入し、曖昧な空間的な概念でとらえられてきており、昨今では、さらに定量的な見方も反映されてきたが、それでも、我が国におけるコンパクトシティの意義は何か、どのような都市なのかについて明確な答えはない。人口減少と環境負荷の面からは市街地を縮退させ、稠密化することが必要かもしれないが、最終的には快適な資産価値のある空間を創造できなければ意味がないことは自明である。

そろそろ、欧米の「コンパクトシティ」の呪縛から解き放たれて、改めて、人口が大幅に減少した際に始めて実現できる快適な都市空間の実現の模索に転換する必要がある。かつては人口急増・過密が求める姿を阻害してきたはずだが、その阻害要因がなくなった現在、その姿を模索していることはその本来の求める姿の実像が実は明確になってなかったことを示していると言える。これからは、ゆとりある空間をどのように快適に、効率的に活用するのかを追及することが重要である。

次の改革に向けて

ー過去、現在、未来ー

かつて、我が国は人口 5000 万人時代に、その後の高度成長は想像できなかったためであろうが、海外移住政策が実行されてきた。海外移住政策は世界各地で苦勞の末重要な成果を残したがその評価は曖昧のままである。これから急減する 2050 年でも 9000 万人レベルの人口を擁することを考えると、急激な高齢化や高い生活水準の維持等のはかつてと大きく異なるものの、あるべき姿の構築とその実現には価値観の転換が不可欠である。

その際には、100 年前とは逆に海外からの移住政策が必要とされよう。日本の国土は世界に類に無いほど安全で緑豊かな自然空間を有しているが、これは世界に誇れるものであり、これを維持することが重要である。この価値を実は日本人自体が評価しておらず、国際的にもアピールしていないが、外国人はそれに気がつき始めている。ゆっくりと戦略的に豊かな国土を守りながら、国際的資金そして人材を受け入れる方向での取り組みが重要である。

日本は江戸時代に鎖国というユニークな対外政策を取り、その間に江戸文化が醸成されたが、一方で国自体の制度疲労も大きかった。明治維新ではそれまでの価値観を変えて外国の文化・文明を吸収し、近代国家の礎を築いたが、同時に、海外では江戸文化を高く評価し、それを受け入れた。誇れる緑豊かな国土も江戸時代には、相当な林業保全を図ったにも係らず都市化地域には禿山が目立ったが、それも明治維新の近代化による燃料の変化

が歯止めをかけ、緑の回復に向かった。外圧をうまく改革に取り込んだのが明治維新であろう。

一方で、大きな改革を実行し、世界に冠たる経済力をつけた今でも日本の文化は鎖国時代の江戸文化等に代表されている。さて、このことを教訓にすることが出来るであろうか。

シンクタンク・コンサルティングの役割

以上のように我が国は 1 度大きな改革に成功し、現在に至っているが、その間の制度・価値観疲労は江戸時代の比ではなく大きい。

すでに高齢社会や国際化の渦中にいるにもかかわらず、高齢者に冷たく、我々の業務は内向きである。海外の情報を入手することには相変わらず熱心であり、いわばガラパゴス化している。海外情報の入手は重要であるが、明治維新の感覚から脱却し、製品の輸出レベルから、そろそろ、真の対外的な姿勢に転換することが必要である。

このような時代の転換の必要性そして、その姿を明示してそのための実現方策を提示・誘導するのがシンクタンクそしてコンサルティングの役割である。政権交代をそのチャンスとして捉えて、この混迷の時期を乗り切り真の改革にすることが求められている。我々のガラパゴス化している業務も実は大いに国際的に誇れるレベルであることも多いため、これまでに蓄積してきた知見を国際競争に勝てる戦略的なノウハウに発展させ、同時に国際的に評価される国土・都市空間の構築を実現すべき時代であろう。

おわりに

変革の実行には国も企業も個人も常に外的圧力が必要とされるが、その条件としては内発的な機運が熟成していることである。今まさにそうであり、そう思いたい。国際化も高齢化も情報化も実体が見えつつある中で真の変革の案はまだ模索中であるが、これを見出すのは過去を知り、深い経験を有するベテランと改革への熱い思いと新たな感覚・価値観そして国際レベルの知見・能力を有する次世代の人材のコラボレーションである。実際に具体化・実行し、その成果を享受できるのは若い世代であり、この変革の可能性を秘めたこの機に活躍できることを幸運と思って全力で次世代の国と自己の「かたち」変革の実現に取り組んで欲しい。